

10月号

昭和62年10月1日
発行 / 編集
岡崎市教育委員会

「で・き・た！」

と思わず口の中で叫んだ

大きな声を上げたら
くずれてしまいそうな気がしたから

五人 四人 三人

ここまで順調に積み上げて
二人 一人で崩れてしまうピラミッドが
今 はじめて完成した

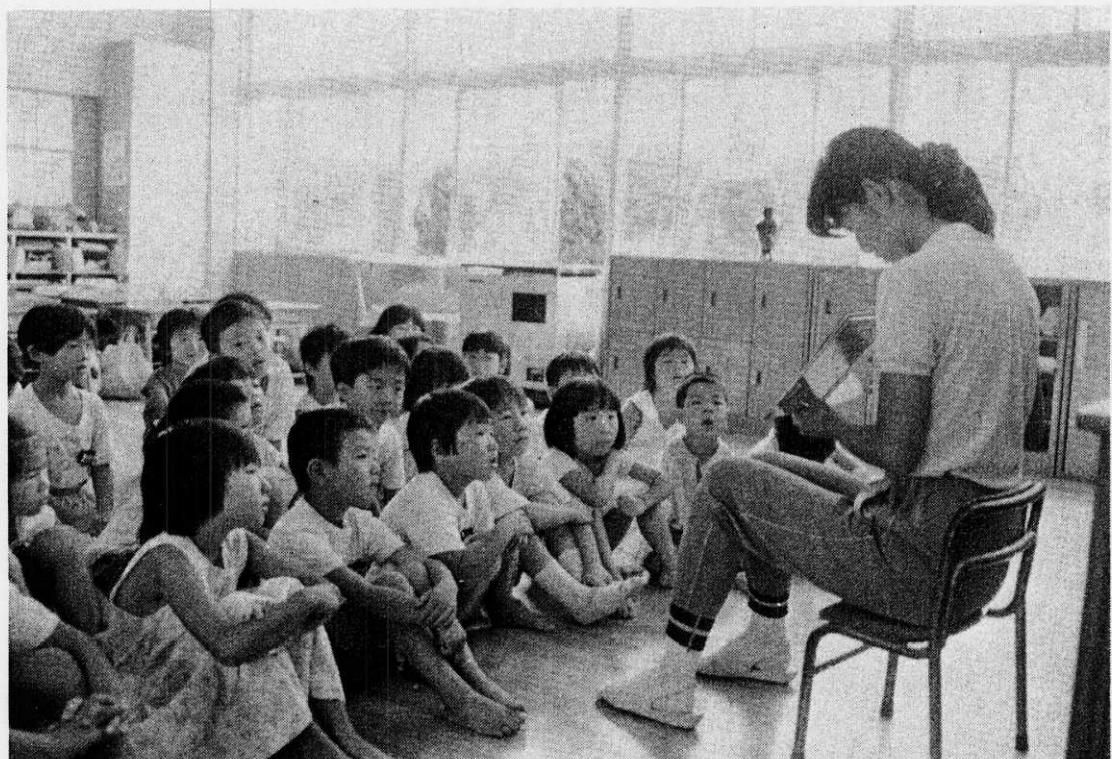
首をきっと上げて

大きく見開いた三十の瞳が
「先生 ヤツタヨ 見て！」
と投げかける

何回も何回もの挑戦の中で
やつと体得した力と力のバランス

そしてみごとな紺
青空の中にピラミッドが一瞬ぼやけた

へ紺へ



(もっと読んで 一 梅園小)

若者の事故、非行防止雑感

— 教育隨想 —

若者の交通事故、少年の非行について、社会問題化されて久しいが依然として後をたたない。

松川英一

交通死亡事故の三割強は、二十五歳未満の運転者によつて占められている。若年運転者が事故を起しやすいという事実は、広く認められてゐるところである。若年運転者が起こしやすい事故のタイプとしては、車両単独事故、正面衝突、

交差点内の出会い頭事故であり、その要因としては、スピードの出しすぎ、ハンドル操作不適、自己本位の運転があげられる。

運転というものは、自分を取り巻く外的状況に適合した行動をとることであり、読み、さらに自分がどのようにするとどうなるかを的確に判断することによってはじめて可能になる。

二、少年の非行防止について

には、幼稚期、学童期からの幅広い交通安全教育を行うことが必要である。さらには、生涯にわたっての安全教育、マナーを身につけることが、国民皆免許時代ともいわれる今日にあって、最良の交通社会実現の道ではなかろうか。

親に入つてもらつた方がいいと思われる場合もかなり見当たる。こうした立ち直りの機会の薄い崩壊家庭の非行少年にどう対応していくかが重大な問題である。警察としては、早期補導を柱として市町村関係機関等と連携を密にし、少年の健全育成に努めているが、なかでも学校、教師との緊密な連携こそ最も必要ではないかと考えている。

中三の技家の授業を横目で見て通る。
机の上の小さな手作り裁縫箱が目に入る。
「わあっ。素敵」思わず口から出る。

が浅いことにより、状況の読み及びその中に含まれている危険についての読みができないという点で、未熟である。また彼らは、自分が交通社会に参加しているという意識に乏しく、運転者としての責任感が低く、安全運転態度が未形成であることが問題である。こうした若年運転者に対する安全教育が効果的に展開された場合、交通事故減少は大いに期待されるところである。

かなり多い。逆説的にみれば、親の愛情が十分に伝わり、親が眞面目に生活している家庭にある子供は、ほとんど非行を犯さないか、万一犯したとしても立ち直つていくことが容易であるが、崩壊家庭ではそうはないかない。身柄引渡しの呼び出しに、「警察で勝手に始末してください」と答える親、「警察がもとと早く捕まんから俺の子供が悪くなつたんだ。」どうそぶく親など、子供を施設に入れる前に、

○その一 楽しい話
技術・家庭科男女共学の効果か、こんなことを言つてゐる中二の男子がいた。
「このごろね、家で母に『母さん、めしまだ?』って言わなくなつたよ。」
自分たちの計画、材料集め、調理実習を通して、協力の大切さを学び、失敗を重ねるなかで、母への感謝の心が芽生えているのか、こんなことが言えるようになつたなんて、楽しいではないか。

アルコール中毒者、借金による蒸発など、家庭が崩壊をきたし、子供の居る場所のない家庭に非行が芽を持ちあげる場合が

家庭科指導員

このごろ出会つたこと

少年非行は、昭和五十八年に戦後第三のピークとなり、それ以降この高原状態が続き、当たり前の家庭からも非行が芽生え、非行の一般化が論ぜられているが、非行問題の真の課題は何であろうか。

羅針盤

かなりの生徒が持っている。五年生の初め、必要もない物も一緒に、高価な道具を購入することがある。それでいて、「机上が狭くて、授業中困りますが、何かよい方法はありませんか。」の質問も多い。中三まで大切に活用していく、不都合

狛犬づくり

ふるさとシリーズ —この人に聞く—

墨を引けますがね。

とさり気なく語られる成瀬氏である。
狛犬づくりは、長方形の原石をは

ことから始まる。およその型にしておいて、それに目、鼻、口などの各部分の墨を引いてから彫るという手間のかかる

ものである。とくに足の部分を彫りぬくには高度な技術が必要であった。

「若い衆が、仕事を横でやつていたとき『やあお前、音がおかしいぞや、足が折れとうへんか』『いや親方、折れて

「いません。」と言うので、コンコンと叩いてみるとすじが入っていることがあつたね。今では機械のおかげで若い者

でも狛犬を作れるようになつたが」

成瀬氏の工場には、七人の岡崎建設職業訓練校生がいる。訓練校の石材科は、

全国唯一のものである。そのため全国から生徒が集まつてくる。先の七人の中に

も在巻 博多などの逸聞
地の出身者がいるが、いず
れも家業を継ぐために技能

を習得すれば、帰郷してしまう者ばかりという。

若い人達が 独力をつく
る技術をどのように覚えて
いくのかお尋ねした。

「猶大は、一対が同じものでなければ商品になりません。半人前の者に一つ彫らせておいて、それには



(生年月日) 昭和二年四月二二日
(工場) 岡崎市石工団地町二の三

美術周報の原形^{ハコ}が面がれておこなが常じていい製品を、新しい製品を作り続けて行こうとする気構えが迫つてくる。

「術を守るためにも、採算が合わないからと言つてやめるつもりはありません。」成瀬氏の傍らには、美術全集、多数の

時が腕前も上がるときだそうだ。

で上達は遅いのが一般的である。自分の故郷に帰る前が、とにかく自分で覚えていかなくてはという気持ちが強いので、

合わせるように一人前の者がもう一つ彫るのです。また、顔の半分を彫つてやつてから、これに合うように残りを彫らせる方法もありますが、基本的には、絵が描けなければいけませんね』

テーマに迫る読みへの考察

圖書館指導員

北川
英雄

「やがておさらい」と予告しておぐ、そして
かかるべき時に子ども達から無記名で、
付けた題名を集める。その中に本当の題
を書いた紙を混入させる。次に題名を板
書し、自分の付けた題名にこだわらずに
よいと思う題名を選ばせる。

話の授業を展開してみたらどうだろ？

ながら、ここまで来たという。
そこで私見だが、「海になみだはいら
ない」というこの本の題名を伏せて、朗

らしい朗読に挑戦してか、全員が読みこなしたので大変印象に残った。聞けば、読みの得意な子をみんなで励まし合い

つかえたり、飛ばして読んだり、改ざんして読み進める子もいるのが普通だ。

図書館指導員
北川 英雄

ではないと言う。彼女たちの物を大切にす
る心にふれる。「手作りだもん、愛着湧
くんですよね、先生」なんて、本当にう
れしいではないか。

岡崎スポーツ少年団その2



スポーツ少年団に入った子ども達の目的は、そのままの技術の向上を目指すことが主なものである。しかし、指導者の立場からみると、心の鍛成を大きな目的としている。そのためには、他地域のスポーツ少年団との交流試合やキャンプなども実施している。これらの行事は、深く子ども達の心の中に刻まれている。

「いよいよぼくの番だ。試合は、ぼくたちが勝っている。てきは、でっかく体格のいい人だ。ぼくはタックルをした。引きずられながらもたおした。ラグビーに入つて勇気がついた。」

「ぼくは二年生の時、ラグビー少年団に入つた。二年生のころは、ただボールをバスしたり、バスをもらつたりするだけだったから、とてもらくだった。だけど三年生になると、きびしくなり、もうやめたい」と思うことが何度もあった。でもバーベキューをしたり、キャンプや金沢に遠せいに行ったりして、とても楽しかった。一番思い出に残ることは、ぜんぜん知らなかつた子たちと友だちになれて、いつしょにラグビーができたことだ。」

(豆ラガードの思い出No.9より)

一つの行事を取り上げても、指導者のボランティア活動に負うところが多いこと、親の支援があることを忘れてはならない。
「いそいそと、体育館へ集まる子どもの姿を見ると、「よく来たね。さあ、きょうも頑張ろう」と声を掛けたくなるのですよ。」
と、ある指導者の言葉。心と技を鍛える貴重な場がここにある。



②



①



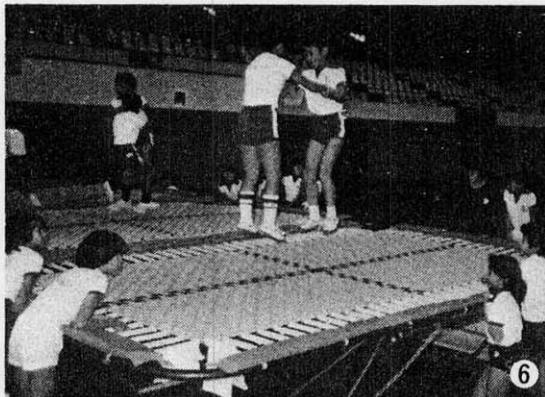
④



③



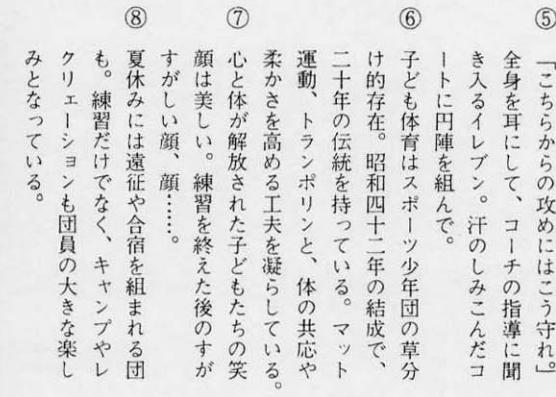
⑤



⑥



⑧



⑦

⑨

① ゴールめざしての快走。そうはさせじと懸命に追いすがる力走。闘志と闘志とが激しく火花を散らす試合風景。遠慮は無用。バスをくい止めようと母親の足にかじりつく豆ラガ一。ほほえましい中にも真剣味あふれる母子交歎ゲーム。

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

② 遠慮は無用。バスをくい止めようと母親の足にかじりつく豆ラガ一。ほほえましい中にも真剣味あふれる母子交歎ゲーム。

③ 相手を見すえる鋭い目。裂帛の気合をこめて突き出す拳。体育館には張りつめた空気が流れる。体とともに心にも大きな成長を見せる。

④ 遅れてなるものか。一つのボールをめがけて二人の激しいダッシュ。チームメイトの目も思わず二人に釘づけとなる。

⑤ 「こちらからの攻めにはこう守れ」全身を耳にして、コーチの指導に聞き入るイレブン。汗のしみこんだコートに円陣を組んで。

⑥ 子ども体育はスポーツ少年団の草分け的存在。昭和四十二年の結成で、二十年の伝統を持っている。マット運動、トランポリンと、体の共感や柔かさを高める工夫を凝らしている。

⑦ 心と体が解放された子どもたちの笑顔は美しい。練習を終えた後のすがすがしい顔、顔……。

⑧ 夏休みには遠征や合宿を組まれる団も。練習だけではなく、キャンプやクリエーションも団員の大きな楽しみとなっている。

教育日々



自主の芽ばえを願い

愛宕小

梅村 京子

「今日、話し合うことは魚つりごっこ大会についてです。」

日直のT男の緊張した声が響く。S子は懸命にチヨークを黒板に走らせていく。

一年生の学級会。低学年の学級会活動はほとんど教師サイドで運営されることが多い。しかし、二年生は二年生なりに自主の芽を伸ばすことができるのでないか。子どもの活躍できる場面となるべく多く取り入れてやりたい、そう考えた。おうむ返しの司会から、徐々に自分の言葉で司会ができるまでに高めてやりたいと願った。

六月、議題ポストに次のように書ががあった。

安全面、技術面、費用面からも二年生には無理だと思われた。魚つり大会をやりたいです。

しかるに、男子を中心に、みんなで魚つりをやりたいとの声がわきあがる。その気になつて、「えさはどうするの。ぼく、つりざお持つてこよう。」などと言い出す者まで出てきた。

「あのね、魚つりにかわるもの考えられないかなあ。」

これからが子ども達のユニークな発想の見せどころである。

ザリガニつりにしたら、人間が魚のまねをしたら等、楽しいアイデアが次から次へと出てくる。

結局、魚つりごっこと称して、棒の先に磁石を取り付け、それで魚をつるることに落ち着いた。

早速、計画係の提案で分担して魚作りが始まった。普段、ぼうつとしていることの多いK男が、家で作ってきたと言つて誇らしげに魚を持って来た時は、何と嬉しく思つたことか。画用紙いっぱいに大物賞の大クジラ。反対に指先ほどのチビ魚も登場。どの子の顔にも待ち遠しさがうかがえる。

時は今

矢北中

吉見 信夫

夏休みを待たずして始まつた市長杯総合体育大会が、陸上競技を残すのみとなつた七月二十日のことである。職員室の話



らい得意満面な顔や、やり遂げたという満足感な顔がいたるところで見られた。

二年生は自主の芽ばえの時、大きな可能性を秘めている。題ボストには意見の山。

期間だったが矢北中は燃えた。市長杯選手激励会で荻野校長から「優勝よりマナー、技術よりもじめにやれ」と激励を受け、矢北中精神を新たにした。

開校三年目の昭和五十八年の市長杯男女総合優勝、男子総合優勝のときも、ちょうど今年のケースと同じであったことが職員室の話題に上がつた。部活指導の終わつた夏の午後の一とき、矢北中の部活のあり方について話に花が咲いた。

七月二十八日、女子総合優勝、男子総合準優勝で開校七年にして二度目の市長杯男女総合優勝杯を手にしたのである。「まじめに努力すれば、必ず良い結果が出る」という矢北中の部活動の本領が發揮でき、何にも優れる価値ある栄光である。まさに

・昭和六十一年埼玉県大宮大会
(四分〇一秒八八全国五位)

・昭和五十九年鳥取県米子大会
(四分〇六秒八八)

そして、今年名古屋大会

(三分五七秒七八全国三位)

私は、まじめに努力することしか指導できなかつたが、生徒たちは、着実に伝統を築いてくれている。

夏休みが終わり、矢北中の新しい伝統を作るために一、二年生は燃えている。

「時は今、

燃えろ矢北中学校」



出場を果たすことができた。

・昭和五十八年新潟県長岡大会
(四分〇一秒〇一全国四位)

・昭和五十九年鳥取県米子大会
(四分〇六秒八八)

おしらせ



岡崎勢大活躍

NHK学校音楽コンクール 西三河地区大会の結果

○浅多 浩介（三島小）
（小学校女子）

岡崎一
岡崎一

（中学校女子）

○永田 麻恵（矢北中）
○小笠原美子（常磐南小）

・身長＝一六二・三七五
・体重＝五七・二キロ

○金賞（県大会出場）
○広幡小学校

・身長＝一五四・五七
・体重＝四五・三キロ

○銀賞（矢作東小学校）
○中学校合唱

・胸団＝八六・八七
・胸団＝七七・五七

○金賞（県大会出場）
○銀賞（南中学校）

○西村 果純（竜南中）
○畠山亜架根（葵中）

○銀賞（矢作中学校）
○長山 昌子（六ツ美北部小）

○安藤 千晴（岩津中）
○井澤 佳代（東海中）

○杉田 純子（生平小）
○宮地 尚子（大門小）

○杉浦 郁代（矢作中）
○飛岡 貴子（福岡中）

○野手 明香（井田小）
○鈴木未奈礼（本宿小）

○中神 舞（根石小）
○稻垣 弓（常磐中）

○豊田 千穂（男川小）
○青山 季代（福岡小）

○吉村 忠弘（岩津中）
○山崎 隆弘（甲山中）

○身長＝一五九・七センチ
○体重＝五二・三キロ

○十一月十日（火）城南小（中間）
○十一月十三日（金）小豆坂小（中間）

○胸団＝七九・五センチ
○胸団＝八五・五センチ

○十一月十七日（火）大樹寺小
○十一月二十四日（火）愛教大附中

○純浦 好美（矢作中）
○草深 勝（矢北小）

○十二月一日（火）東海中
○十二月二十七日（火）細川小

○身長＝一六七・七センチ
○体重＝六二・〇キロ

○十一月二十日（火）愛教大附中
○十一月二十七日（火）城南小（中間）

○胸団＝八五・五センチ
○胸団＝八五・五センチ

○十一月二十四日（火）愛教大附中
○十一月二十七日（金）矢作幼

○身長＝一六二・三七五
○体重＝五七・二キロ

○十一月二十九日（火）大樹寺小
○十一月二十九日（火）東海中

市内全小学校に パソコン設置

今回、市内三十七校の小学校
にパソコンが設置されることに
なった。昨年度すでに設置され
ている四校と合わせて市内全小
学校にパソコンが設置されたこ
とになる。

そこで、パソコンが効果的に
活用されるよう、操作講習会を
三日間にわたって開催した。各
校から平均二名ずつ参加された
先生方も熱心に受講された。

主な講習内容・会場は次のと
おりである。

○二十四日（木）常磐東小 パソコンの設置と操作

○二十五日（金）常磐東小 ワープロソフトの操作

○二十九日（火）商工会議所 簡単な教材製作の実習

○上地小学校女子 優勝

■小学校バレーでも大活躍

三位 矢作北中学校
四位 矢作北中学校
五位 鴨下 剛（矢北中）
●陸上 三種競技A（男）
五位 純浦 好美（矢作中）
●陸上 走り高跳び（男）
六位 志賀 充（美川中）

特選

○近藤 裕治（男川小）
○浅野 吉範（六名小）

○草深 勝（矢北小）
○中島 智信（緑丘小）

○森川 友彦（連尺小）
○平井 康雄（細川小）

○梁瀬 英章（新香山中）
○山本 圭一（附属中）

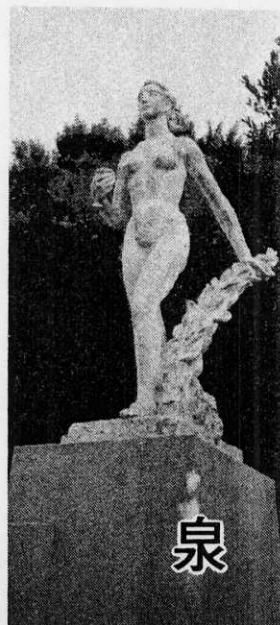
○吉村 忠弘（岩津中）
○山本 圭一（附属中）

○浜崎 弘己（大樹寺小）
○菅田 義昭（矢北中）

○阿部 正和（美川中）
○中根 隆二（恵田小）

■後期教育実習校（四週間）

連尺小（四名）・本宿小（三
名）・大門小（三名）・上地
小（三名）・梅園幼（四名）
○阿部 正和（美川中）



女神の像

岡崎公園

岡崎公園運動場の掲揚塔に対

するように女神の像が立つてい

る。この像が建立されたのは、

昭和二十五年のことである。

この年、第五回の国民体育大

会が愛知県下で開催された。岡

崎はバーレーボール会場として全

国の中でも、全国に名を馳せる活躍

をしていたからである。

バレーコート場整備を進める

中で、モニユメントを建てよう

との声があがつてきた。この声

を受け、鈴木基弘氏の仲介で東

京の彫刻家毛利教武氏に製作を

依頼することになった。

戦災復興の目覚ましい町にふ

さわしい作品にしたい。この願

いから、左手に古きを捨て、右

手に岡崎のシンボル葵を持げて

前進する女神の構想を得、心血

を注ぐ製作が始まった。完成は

國体直前の十月二十六日。二十

八日に除幕式の運びとなつた。

以来三十七年。「岡崎のバレ

ー」は健在で、全国にも通じる

活躍ぶりはつとに知られている。

その後、バレーコートはテニ

スコートに様変わりした。しか

し、女神の像は公園に残され、

市民陸上や中学校総体ごとに選

手にほほえみを送り続けてきた。

静かな秋の夜、十月七日の中秋の名月をながめたい。おだんごやおいもを供えて。そのわきには秋の七草をかざつて。

おみなえし、すすき、ききょう、なでしこ、ふじばかま、くず、はぎ。

しかし、最近おみなえし、ふじばかまの姿が見られない、さびしいことだ。

シ

オ

ス

ア

スポーツ少年団人口は、小学生の5%に過ぎない。残り95%のスポーツ生活はどうなつていてるのだろうか。それにつけても、ガキ大将に引き連れられて野山を駆けまわった遊び体験は、スポーツの原点であった。それが失われたことの意味は大きい。未来に大きな損失を思うのは杞憂だろうか。

秋祭りの季節を迎えた。通りすがりの神社にたつのぼりに、戦後、間もないころの村祭りがしのばれる。祭りの余興として、境内で催された素人芝居の見物には秘めたやさしさと穏やかさが、子どもたちを包みこむものであろう。

常にとはいひかぬまでも、おりおりは温顔で人の前に立ちたい。

おばりながら、遅くまで楽しんだものである。今は、カラオケがそれに代わり、時の流れを感じる。

*数のはなし

東京図書

ペレリマン

¥1300

*総点検 戦没者の実像

PHP研究所

高橋史朗

¥1300

*身のまわりのほんものセモノ 科学朝日編集部

朝日新聞社

¥1000

*左翼がサヨクになるとき

集英社

磯田光一

¥1400

*学校で出来ること

外山滋比古

出来ないこと

読売新聞社

¥1000

学校で出来ることと家庭で出来ることのまん中に、だれもが教えない手つかずの空白部分ができる。それがしだいに拡大しようとしている。学校で出来ることと出来ないことを考えるのは、家庭で出来ること、出来ないことを浮かび上がらせることになるはずである。

教師が読み、お母さんに薦める書。

これは、2年間、読売新聞の夕刊に同タイトルで連載されたもの。

表紙写真
・カット

梅園小
東海中

西崎久代
後藤志津代
松井隆一